

第28回富士川游学術奨励賞を受賞して

松村 紀明

帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科／順天堂大学医学部医史学研究室

この賞を、故中島洋一先生に捧げます。

受賞した論文は「明治種痘の研究—補完する種痘積善社と対立する種痘勸善社—」と題する、あたかも長年にわたる種痘史研究の成果を思わせるような大胆なタイトルである。しかしながら、この論文を執筆するきっかけは2018年4月に佐賀大学の青木歳幸先生から『天然痘との闘い』シリーズ刊行の種痘史研究プロジェクトにお誘いいただいたところにある。すなわち、本論文を書き上げたのは2020年の秋なので、種痘史研究を開始してから実質2年半でまとめた成果が受賞したということである。医史学会だけでなく、日本の各地には10年単位で種痘史を研究している先生方が大勢おられるなかで、研究開始からわずか2年半で書き上げた種痘史の論文が受賞するというのは、背中に冷や汗が流れる思いである。

いや正直に言えば、本研究は種痘史研究の成果というよりも、地域医療史研究の成果を種痘を通してまとめたものといった方が正確である。本論文のベースにあるのは江戸から明治期にかけての岡山の地域医療史研究、とりわけ同県瀬戸内市の在村医家・中島家の研究である。瀬戸内市が岡山市の東西どちら側の隣なのかも理解していなかった私が、本会名誉会員である酒井シヅ先生に誘われるままに中島家の研究に参加したのは20年ほど前のことだった。江戸時代から続く同家の医学書や医療記録はほぼ手つかずの状態に残されていたが、当初の同家に関する研究は先祖調べを中心とした中島洋一先生による個人的な活動であった。それが「江戸のモノづくり」(科研費・特定領域研究)をきっかけとして多数の研究者が関わるようになり、私が加わったのもそのころであった。

そしてその後、2011年から継続的に中島家や岡山市の地域医療に関する科研費を僭越ながら私

が代表として獲得するという幸運にも恵まれ、岡山県下のいくつかの在村医家史料をみる機会を重ねてきている。

一般的に、日本における様々な近代社会のシステムは明治維新の後に新政府による中央集権的な政策に先導されながら達成された、と理解されており、医療システムもそのなかに含まれると考えられている。しかしながら、岡山県下の中島家を含めいくつかの在村医家史料をみていくにつれ、少なくとも近代的な医療システムの草創期である明治初期の文書からは、政府や県の示した新しい方針に諸々と従っていくという姿はみえてこなかった。それどころか、「御一新」に際して岡山のそれぞれの地域の医師たちからの「新しい時代の医療は俺たちがつくってみせる」という強い気概が論文執筆の際に調査した文書の端々から感じられた。多くの在村医家の蔵書に福澤諭吉の啓蒙書が含まれていることは、決して偶然ではないであろう。

海原亮先生は『江戸時代の医師修業』のなかで、種痘の社会的意義について、近代医制、国家の衛生政策を準備するものであると評価している。また、布施昌一先生は『医師の歴史 その日本の特長』のなかで、日本の医師・医業の特色としての開業医制度は江戸時代に十全の発達を遂げ、そのまま明治以降の近代日本に受け入れられて、徳川開業医体制＝日本開業医体制＝日本医療体制の図式となっていった、という主旨のことを



書かれている。

当然のことながら、江戸期の種痘の担い手はそれぞれの地域の町医・在村医であり、また、拙論で明らかにしたように、少なくとも明治初期において彼らが引き続きそれぞれの地域における種痘で大きな役割を担っていた。以上のことから、両先生の主張を言い換えれば、明治新政府によって

西洋諸国から医療システムが輸入される前から、すでに江戸期の医師たちは、ネットワークを構築し、医療情報・医療資源を共有しており、さらにそれは、明治初期においても受け継がれ、それが日本の近代的な医療システムへの前準備となった、ということではないだろうか。

例会案内

日本医史学会 1月例会

令和5年1月28日(土)
オンライン開催

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念1月例会

挨拶 小曾戸洋(『医学史事典』副編集長)

第Ⅰ部 世界の医学(1):古代から近世まで

矢口直英(『医学史事典』第Ⅰ部 執筆者代表)

第Ⅱ部 世界の医学(2):近現代

山内一信(『医学史事典』第Ⅱ部 執筆者代表)

第Ⅲ部 日本の医学(1):古代から近世まで

真柳 誠・青木歳幸

(『医学史事典』第Ⅲ部 執筆者代表)

第Ⅳ部 日本の医学(2):近現代

渡部幹夫(『医学史事典』第Ⅳ部 執筆者代表)

第Ⅴ部 社会の中の医学

永島 剛(『医学史事典』第Ⅴ部 執筆者代表)

総括 坂井建雄(『医学史事典』編集長)

日本医史学会 3月例会

令和5年3月25日(土)
オンライン開催

1. 「華岡流麻酔法の終焉と吸入麻酔の普及にお雇い外国人医師が果たした役割」

牧野 洋(浜松医科大学附属病院
麻酔科蘇生科 講師)

明治維新の頃、華岡流の麻酔法が衰退し、新しく吸入麻酔薬による全身麻酔法が普及し

た。そのことにお雇い外国人医師達が果たした貢献を紹介する。

2. 「(未定)」 吉川澄美(東京都)

日本医史学会 4月例会

令和5年4月22日(土)
オンライン開催

1. 「レブラと奇跡 脱神話化と脱医学化に向けて」
堀 忠(関西学院大学大学院
神学研究科研究員)

表題拙著(新教出版)の内容に沿って、古代キリスト教文献におけるレブラと奇跡の概念史(成立、展開から分岐まで)を追跡する。

2. 第28回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
「(未定)」 松村紀明(帝京平成大学)

以上は変更の可能性がありますので、必ず開催直前に医史学会のサイトをご確認ください。また、5月以降についても確定し次第、同サイトでご案内いたします。

<http://jsmh.umin.jp/events.html>



しばらくはZoomを用いたオンライン開催を継続いたします。参加方法については、日本医史学会事務局(jsmh@juntendo.ac.jp)にお問い合わせ